

豊かな心をはぐくむ家庭教育の支援

大和郡山市立片桐小学校 教諭 山 村 衣 里

Yamamura Eri

要 旨

現代はモノと情報にあふれている時代である。モノに囲まれ、膨大な情報が氾濫する中で、子どもが自分を見失うことなく、心豊かにいきいきと育つためには、人と人とのふれあい、家族との豊かなコミュニケーションが大切だと考える。そこで、学級として、また学校として、子どもを心豊かに育てる家庭教育に対してどのような支援ができるのかを研究した。

キーワード： 豊かな心、家庭教育の支援

1 はじめに

本校では「生きる力」の基礎・基本として「明るく元気に、支え合い響き合い、自ら表現する」子どもの育成を目標に実践を行っている。しかし、本学級(6年)には自分の思いを伝えることが苦手な子どもや、相手の思いを汲むことが難しい子どももいる。そこで、日々の「ひと言日記」や読書活動を通して、子どもと教員、子どもと親の心の通わせ合い方や、親と教員との連携の在り方を考える。また、学級懇談会を通して、親同士が子育てについて温かくおおらかに話し合える関係を築き、共に子育てできる支援の在り方を考察する。

2 研究目的

子どもがいきいきと心豊かに育つ家庭教育の支援の在り方について考察する。

3 研究方法

- (1) 「ひと言日記」を通したつながり
- (2) 読書活動を通した連携
- (3) 学級懇談会を通した子育て支援の実践

4 研究内容

- (1) 「ひと言日記」を通したつながり

毎日、帰りの会の時間に子どもは「ひと言日記」を書いている(図1)。授業のこと、遊びのことなど、その日にあった出来事や思ったこと、感じたこと、考えたことを自由に書いている。これに、教員は励みになるようなコメントを毎日書き、子どもに返している。この「ひと言日

記」の取組を通して、見えていなかった子どもの思いに気付いたり、子ども同士のトラブルに迅速に対応したりすることができた。

また、「ひと言日記」は週に一度、親にも読んでもらい感想を書いてもらっている。この感想を子どもも楽しみにしており、親からの感想は子どもの励みにもなっている。

親から、「高学年ともなると、学校であったことをあまり話してくれない。」といったことをよく聞く。これも子どもの発達の一過程と見ることもできるが、親にとっては不安なものだ。この「ひと言日記」を通し、子どもががんばっていることや子どもの心の変化など、親は子どもの学校での様子を知ることができる。更に、「ひと言日記」を話題にし、親子のコミュニケーションが図れる。親が安心することで、子どもも安定した学校生活を送ることができる。また、文字に残すことで、子どもは何度も読み返すことができ、自分を振り返る資料となっている。このように「ひと言日記」は、子どもと教員、親と子どもをつなぐ手立てとなっている。

月	日	曜日	学年	内容	ひとこと	
10	20	火	2	予行系東習があった。練習でグループのとき早く多量かきになった。本番では完ペキにしよう。よく聞いて、いじりた。音響で折り返し練習した後、半分見えた。今度はがんばって前半を見よう。	敬老の日	
10	23	木	2		秋分の日	
10	24	金	2	準備がある。また先生も6年で運動会が決まると言っていた。6年だからか人はず。小学校生活最後の運動会。演技は、自分の事をいじりた。	毎日暑い。運動会の練習。ご苦労さ。今日は水泳。最後の運動会。おめでとう。思い、練習、準備、頑張りに頑張る。お母さん、お父さん、おじいさん、おばあさん。	

図1 ひと言日記

(2) 読書活動を通じた連携

ア 学校の取組

(ア) 朝の読書

学校では、毎週火曜日の朝、全校一斉に15分間読書に取り組んでいる。1、2年では教員による読み聞かせを中心に行い、3年生からは自分の読みたいものを選び各自で読み進めている。このように、読書の時間の充実を図るとともに家庭にも読書の輪を広げ、心豊かに生きる子どもの育成を目指している。

(イ) 地域の図書館との連携

大和郡山市立図書館と連携し、授業で扱っている教材に関する図書や子どもの調べ学習などで役立つ図書資料を検索してもらったり、集団貸し出しをしてもらったりしている。

4月に国語科教材「森へ」（6年・光村図書・星野道夫著）を初めて読んだとき、子どもの一人が「えっ、これでおしまい？もっと読みたかったなあ。」とつぶやいた。教科書は「森へ」の前半部分を抜粋したものだった。子どもの読書活動を広げたいと考えていたこともあり、大和郡山市立図書館の司書に相談をした。子どもにも読みやすい本を中心に星野道夫さんの著書や写真集など27冊の本をリストアップし集団貸し出しをしてくれた。それらの本を6年の各学級に2週間ずつ置き読み合った。子どもは著者の世界にふれることができ、とても喜んでいて。休み時間になると、子どもは私のところへ本を持ってきては「先生、ほら、このシロクマの赤ちゃんかわ

いいよ。」「この本、教科書の続きがのっているよ。」など嬉しそうに語ってくれた。

(ウ) 親同士の連携

子どもの豊かな心をはぐくむために、心をたがやす実践として、学校図書館が心のオアシスになるような活動をしている。2月に子どもが本の読み聞かせをしてくれる。図書委員の子どもが全校の子どもに呼びかけ語り手を募集し、「お話の森」の運営を自分たちで行う。語り手は低学年から高学年まで幅広く、読まれるものも絵本、紙芝居など様々である。

このような子どもの活動を知って、親から「子どもに本の楽しさやおもしろさを知ってもらいたい。」「本の世界を広げて欲しい」という声があがった。そこで2003年度よりスタッフを募集し、親がボランティアとして、本の読み聞かせをしてきている(図2)。月に2、3日のペースで昼休みに図書館で「おはなしの森」を開いている。

「おはなしの森」が開かれているとき、学校図書館は子どもであふれている。活動をしている親がまわりの親にも声をかけ、多数協力してくれている。また、幼稚園の降園の時間帯でもあるので、幼稚園児とその親も参加している。このことは本校の子どものみならず、地域の子どもの豊かな心をはぐくむことにつながるだろう。

語り手は主に親や校長であったが、親子で「おはなしの森」の語りをしてくれたこともあった。読み終えたとき、母親が子どもを「がんばったね。」と抱きしめる場面も見られた。家庭で本のことを話し、「おはなしの森」で出会った1冊の本を通して親と子が心通わせてできていると思われる。

(I) 親と教員の連携

夏休みには親と教員がいっしょに本の修理をしながら、家庭での子ども様子や自分自身のこと、心に残る本のことなど楽しく話した(写真1)。夏休みの家庭での子どもの様子が分かり、学校生活では知ることのできなかつた子どもの一面を知ることができた。ボランティアの人数は増えている。

イ 学級の取組

(ア) 学級文庫の充実

学級文庫の図書は教科、特に歴史に関するものが中心である。そこで、学級文庫の充実を図るために、子どもの家にある本の中でみんなに紹介したい本、読んで欲しい本などを持ち寄った。

「お話の森」のスタッフを募集しています

子どもたちとお話の世界を楽しみませんか。
そして、お話に目を輝かせる子どもたちの姿に
出会ってみませんか。

「お話の森」は、昨年発足したグループで、片桐小学校を中心に、子どもたちに絵本や紙芝居などを語ってくださっています。現在10名のお母さんが、活動されています。その仲間に加わっていただける方を募集しています。特別な技術はいりません。ご自分のスタイルで子どもたちに絵本や物語を語り、一緒に楽しんでいただくお気持ちがあれば、お母さんお父さんおばあちゃんおじいちゃん、どなたでも結構です。19日に打合せがあります。今回の打合せは午前9時からです。興味のある方は、北校舎1F総合資料室(分からない場合は、事務室でお聞きください)にお越しください。お気持ちがあっても、当日ご都合のつかない方は、お子さんを通じて、片桐小学校図書室担当久富まで、ご連絡ください。(電話、FAX、Eメールでも結構です)

なお、6月22日給食試食会、低学年参観日
23日給食試食会、中学年参観日
24日高学年参観日
の昼休みにも「お話の森」を予定しています。スタッフ参加希望でない方も、お気軽に様子をご覧ください。

※ 学校と「お話の森」は、子どもたちに絵本を語り、家族で楽しむ時間が、すべての家庭にまで広がっていくことを願っています。

図2 スタッフ募集ちらし



写真1 本の修理風景

どのようにすれば互いに気持ちよく貸出しが行えるか、学級会で話し合った。本を読んだ子どもが、貸してくれた子どもに一言感想やメッセージを書き、教室の後ろに掲示するなどの工夫をしている。このことは子どもの読書意欲を高め、読書の幅を広げることにつながるであろう。

(1) 詩の朗読

9月は国語科教材「あいたくて」(6年・光村図書・工藤直子著)の発展として、工藤直子さんの4冊の詩集を学級で回覧し読み合っている。子どもは自分のところに本がくると、まず家庭で全部読み、好きな詩を1編選び朝の会で朗読する。そして、この詩を選んだ理由も発表する。子どもには、前日に家の人の前で読むように伝え、このことは学級通信を通じて、家庭にも協力を求めた。1冊の詩集を通して親と子が詩のおもしろさを知り、子どもとの対話の機会になることをねらいとしている。更に、家庭での読書習慣の一步になることを願っている。

(3) 子育て支援

親と教員が話し合う機会は新学期当初の家庭訪問、夏休み前の個人懇談、授業参観後の4回の懇談会である。この限られた懇談会を通して、子育て支援となるようなことはできないかと考えた。できるだけたくさんの親に参加して頂けるように前もって学年通信や学級通信で内容を知らせたり、子どもから親へ懇談会の内容を伝えてもらったりした。

毎年、6月の懇談会は親が中心となり、学年で親子レクリエーションを行っている。今年はソフトバレーボールを行った。子ども対親、親対親、子ども対子どもで対戦した。親同士のチームワークが良く楽しい会となった。この会は何の学年も参加人数が多く、親同士のつながりができる場となっている。

ア 学級懇談会にける子育て支援の実践

(7) 設定理由

10月の参観では、日頃の子育てについていろいろな話ができるような懇談内容を考えた。絵本「おかあさんになるってどんなこと」(内田麟太郎著)を読むことを通して、子育ての中で大切なことを思い出してもらえようと考えた(図3)。本の中でウサギのミミちゃんとターくんが一生懸命考えたおかあさんになるとは「子どもの名前を呼ぶこと、子どもと手をつないで歩くこと、そして、心配して思わずぎゅっと抱きしめて、思わず涙が出ること」である。きっとこれに共感し、子育てのしんどさの中にある楽しさ、喜びを思い起こすことができるだろうし、お互い感想や意見も出しやすい内容であると考えた。



図3 絵本

(1) 活動計画案(1時間)

ねらい 絵本「おかあさんになるってどんなこと」を読むことを通し、親子のスキップの大切さや日々の忙しさの中で忘れてしまいがちな子育ての楽しさ、すばらしさについて出し合い、子育てについて考える。

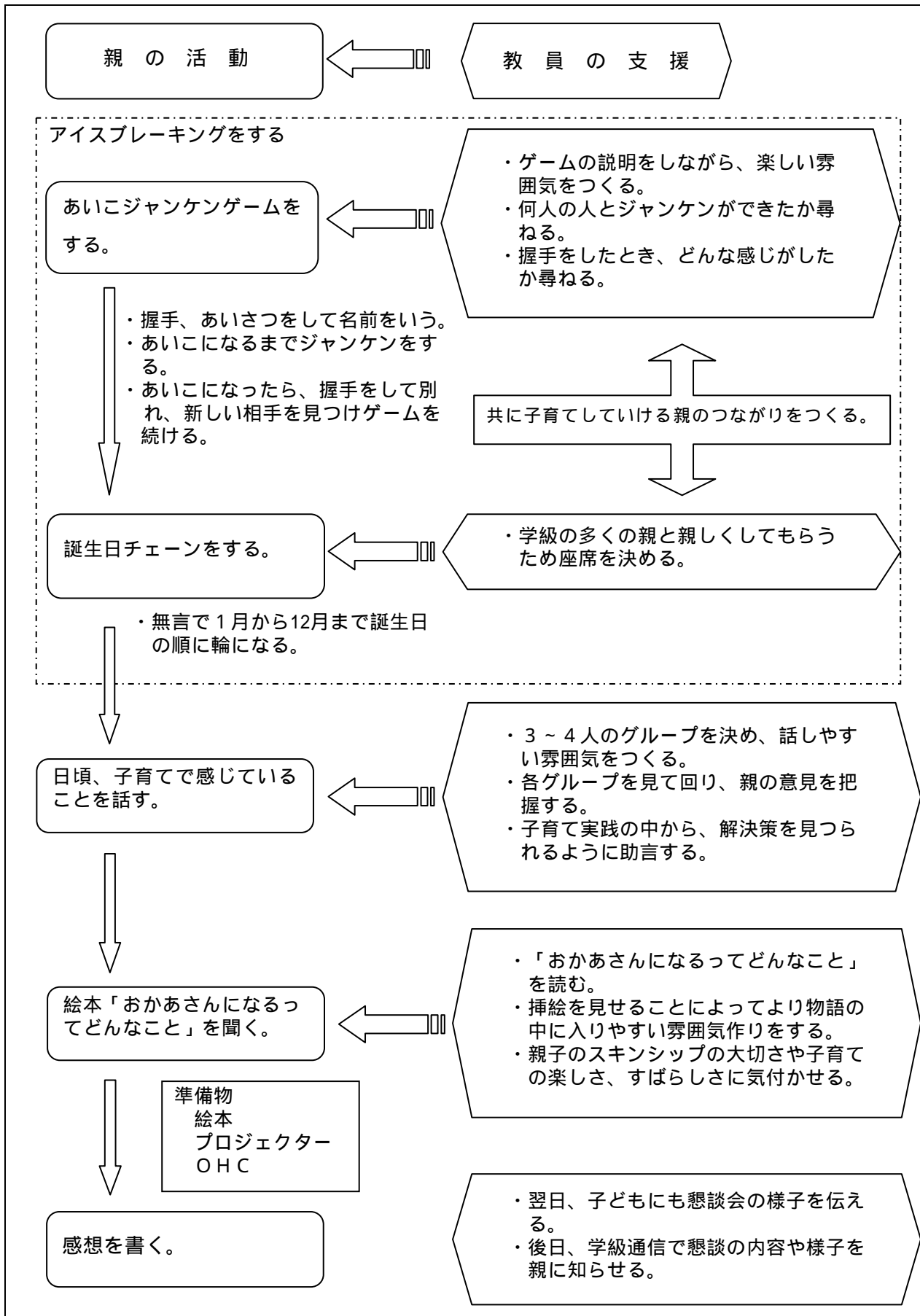


図4 活動計画案

(ウ) 親の感想（抜粋）

- ・ 学級懇談会の初めにゲームをし、普段話さない人とも話げできた。
- ・ ゲームを通して、心が和やかになった。人と仲良くなり、その人を分かつろうとするには、握手などで体を触れ合うことが大事だと思った。
- ・ 絵本を聞いて心が温まった。豊かな心をはぐくむために、絵本の読み聞かせが大事だということが分かつた。
- ・ 「おかあさんになるってどんなこと」の最後にあつたように、ぎゅつと抱きしめてあげることが大事だと思った。どんな言葉よりも、とにかくぎゅつと抱きしめてあげる。何もしてあげられない親だが、これだけは続かつたい。

5 研究結果と考察

教員が子どもの「ひと言日記」に毎日コメントを書き、親には感想を書いてもらった。子どもは親の感想を楽しみにしていた。しかし、全員の親からの感想が無いことが多かつた。そこで、学級通信を通じて親に呼びかけたり、親に会つて子どものことを伝えたりしてきた。また、読書活動を通して、親子で本の世界にふれる機会をつくつてきた。親子で詩を読み合つたり、詩について話をしたりすることは、豊かな心をはぐくむ一歩になった。更に、地域の図書館とも連携し、子どもの読書活動を深めることができた。

学級懇談会では話しやすい雰囲気の中で、親として子どもとどう向き合うかという意見交換をすることで、自分の子育てを振り返つてもらふよい機会となつた。日頃、話をしていない親とも子育てについて悩みを出し合い、親同士が親しくなつた。また、絵本「おかあさんになるってどんなこと」を聞いた後、家庭でぎゅつと抱きしめてもらつたり、優しい言葉かけをしてもらつたりした子どもがいた。その子どもは少し照れてはいたが、嬉しさを隠しきれない様子だつた。懇談会での活動が、家庭で生かされていることを実感した。このような機会を少しでも多くもちたいと考える。

6 おわりに

子どもの豊かな心をはぐくむ家庭教育の支援として、今後は、子どもと親が一緒にできる様々な体験活動の場をつくることが大切である。このような活動を通して、子どもと親が心を通わせ合い、親同士が気軽に子育てについて話し合つていける人間関係をつくることのできるのではないだろうか。また、その活動に教員も参加し、校区自治会等への働きかけも含めた、共に子育てしていく社会を築くことが求められる。

参考文献

- (1) 奈良県立教育研究所 指導者のための家庭教育サポートブック
きらきら子育て 今日から明日へ 平14
- (2) 奈良県立教育研究所 親学サポートブック 平15